

幸福に関する古代ギリシア哲学者たち

江口聡

2023-06-02

この文書をレポートで参照・引用する場合は、文献表では以下のように表記すること。

江口聡 (2023) 「幸福に関する古代ギリシア哲学者たち」、講義資料、6月2日版

1 古代ギリシアでの「幸福」

古代ギリシアの哲学者たちは「幸福」について頻繁に議論していた。その議論は現在の哲学者によっても頻繁に言及され検討される。

ただしまず念頭に置いておかねばならないことがある。古代ギリシア人たちにとっての「幸福」は「エウダイモニア」「エウゼーン」という言葉で表されるものであり、単に「ハッピーな状態である」というよりは、「よくやっている」こと、「自分がよくやっていることを意識していること」などを意味するとされている。古代ギリシアの哲学者にとっては、幸福である、つまりよく生きるということは、楽しくやっていることなのか、それともそれと別のものなのか、ということが問題になったのだ。

2 プラトン

プラトン (前 427-前 347) の対話篇『ゴルギアス』では、人間は自分の欲望のままに放埒に生きることこそよく生きることであり正しい生き方だとするソフィストのカリクレスと、秩序ある正しい生活をするところよく生きることだとするソクラテスが議論で激突する。

プラトン『ゴルギアス』から

カリクレス 人間およそ何者に対してであれ、奴隷として仕えながら、いったい、どうして幸福であることができようか。いやいや、自然本来における美や正義とは、こういうことだ。それをいま、このわたしが、包むところなくはっきりと言って聞かせよう。

すなわち、人は、正しい生き方をするためには、自分自身の欲望を抑制するようなことはしないで、これを最大限に許してやり、そして、勇気と思慮をもってその最大限にのぼしたもろもろの欲望にじゅうぶん奉仕し、欲望の求めるものがあれば何でも、そのときそのときに、これを充足させてやるだけの力をもたなければならぬ。しかしながら、けだしこのようなことは、とても世の大衆のないうところではない。そこで、彼ら大衆は、それにひけ目を感じるがゆえに、こうした能力

のある人たちに非難の矢を向けるのであるが、これも、つまりは、おのれの無能力をおおい隠そうという魂胆にほかならぬ。そして口を開けば、放埒は醜いことだと主張して、さきの話のなかでわたしが言った生まれつきすぐれた素質をもつ人たちを抑えつけ奴隷化しようとするわけだ。そしてまた、自分たちは快楽に満足を与えることができないものだから、しきりと「節制」や「正義」を誉めたたえるけれども、それは要するに、自分たち自身に意気地がないからなのだ。……

いや、ソクラテス、あなたは真実を追求していると称しているが、よろしい、それなら、そのありのままの真実とはこうなのだ。すなわち、^{おご}傲りと、放埒と、自由とが、ひとたびそれを裏づける力を獲得するとき、それこそが人間の徳というものであって、それ以外の、あのお上品ぶったいろいろの飾り、自然に反した人間のあいだの約束ごとなどは、馬鹿げたたわごとにとすぎず、なんの価値もないものだ。

ソクラテス まことに堂々と、カリクレス、君は議論を徹底させ、率直に披瀝してくれる。じっさい、ほかの人たちなら、心には思っているが口に出してはなかなか言いたがらないようなことを、君はいま、あからさまにぶちまけてくれているのだから。

しからば、ぼくからも君にお願いしておこう。いかなることがあっても、その追求の手をゆるめないようにしてくれと。人はいかに生くべきかということがほんとうに明らかになるためにね。

では、どうか言ってくれたまえ。君の主張によれば、人間本来のあり方になかったような者になろうとするならば、もろもろの欲望を抑制すべきではなく、できるだけ大きくなるままにゆるしてやって、なんとしてもそれに満足を与える^{みち}途を考えてやらなければならぬ、そしてまさにそれが人間の徳性にほかならぬと、こう言うのだね？

カリクレス いかにも、それがわたしの主張するところだ。

ソクラテス そうすると、何ものも必要としないような人たちが幸福なのだとされているのは、あれは間違っているわけだね？

カリクレス もしそうだとしたら、石や死人たちがいちばん幸福だということになるだろうからね。

(略)

ソクラテス ……問題の二つの生き方、秩序ある生活と放埒な生き方のそれぞれについて、つぎのように言うことを君は認めるかどうか、まあ考えてみてくれたまえ。

いまここにAとBの二人の人間がいて、二人ともそれぞれ、たくさんの甕を持っているとしよう。Aの人が持っている甕はいずれも傷のない健全なもので、その一つには酒、一つには蜜、一つには乳というようにして、そのほかにたくさんの甕がいろいろのもので満たされている。ただ、こういったいろいろの液体の、一つ一つの補給源はめったにないうえに、近よりがたく、それを手に入れるためにはさんざん困難な苦勞をしなければならぬものとしよう。

さて、Aの人は、いちど甕を満たしてしまえば、あとはもう、注ぎ入れることもしなければ、それに気をつかうということもなく、こうした点に関しては平静な落ち着きを保っている。これに対してBの人のばあい、補給源に関しては、いちおう補給可能ながら困難な仕事であるというAの人と同じ条件にあるけれども、ただ、それを入れる容器のほうに穴のあいた傷ものばかりであって、ために彼は、夜となく昼となく、たえずそれを満たす仕事をつづけていなければならない。そうしないと、極度の苦痛を味わうことになるのだ。

はたして君は、それぞれの生活がこのようなものであるとしたら、放埒な人の生活のほうが秩序

ある人の生活よりも幸福だと言うだろうか。どうだね、こんなふうに言えば、いくらか君を説得して、秩序ある生活のほうが放埒な生活よりも善いということを承認させることになるだろうか。それとも、まだ説得するにはいたらないだろうか。

カリクレス その説得は功を奏さないね、ソクラテス。なぜといって、自分の甕が満たされた第一の男にとっては、もはや、なんの快樂もありえないわけだからね。それこそまさに、さっきわたしの言ったような、石に似た生き方というものだ。なにしろ、いったん満たされてしまったのちは、もはや喜びも苦しみもなしに生きるのだから。いや、快く生きるということは、できるだけたくさん「流れこむ」という、まさにそのことのなかにあるのだ。

ソクラテス たくさん流れこむとすれば、当然の理として、出ていくほうもまた、たくさんでなければならぬし、流れでるための穴も、やはり、なにか大きなものでなければならぬわけだね？

カリクレス たしかにその通りだ。

ソクラテス こんどは、なんだか、君の言う生き方は、カドリオン^aの生活を思わせるね。なるほど、死人や石のように生きるのとは、たいした違いだ。

ではひとつ、言ってみてくれたまえ。そのような生き方について君が念頭においているのは、たとえば、腹がへることや、また空腹のときにものを食べることなどだろうね？

カリクレス いかにも。

ソクラテス それから、喉が渇くことや、渇いているときに飲むことなども、そうだね？

カリクレス そうだ。また、そのほかのおよそありとあらゆる欲望をもち、それらをのこらず満たすことができ、それによって喜びを感じながら幸福に生きるということを言っているのだ。

ソクラテス よくぞ言ってくれた、すばらしい友よ。どうか、そういうふうには、最初にはじめてときの調子を最後までつづけてくれたまえ。恥ずかしいと思ったりするのは禁物だ。しかしどうやら、そう言うばかりのほうも、恥ずかしいのを我慢しなければならなくなったようだ。

まず手はじめに聞くが、人が疥癬にかかって、かゆくてたまらず、思うぞんぶんいくらでも掻くことができるので、掻きつづけながら一生をすごすとしたら、これもまた幸福に生きることだと言えるのかね？

^aチドリ科に属する貪欲な鳥。

3 アリスティッポス

プラトンの同時代人で、ソクラテスの弟子でもあったアリスティッポス (前 435–前 355) は典型的な快樂主義者だと考えられている^{*1}。

アリスティッポスは享樂的な生活を好み、美食や愛人との生活を堂々と楽しんだとされている。ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』では、アリスティッポスは「個々の快樂はそれ自身のゆえに望ましいものである」とし、「快樂が目的であることの証拠としては、われわれは子供の頃から本能的にそれに親しんできており、そしていったんこれを手に入れると、もはやそれ以上に何ものをも追い求めはしないし、またそれと反対のものである苦痛ほど避けるものは何もないという事実をあげた」とされている。

ただしアリスティッポスは、ありとあらゆる快樂を求めるべきだと主張したのではなく、いま現に手元にあ

^{*1}納富 (2021) 参照。

り楽しむことができる快楽を充分に楽しむべきであり、まだ存在しない快楽、つまり単なるあこがれや快楽への無駄な欲望の追求は否定したとされている。要するに「今現在を楽しむこと」が彼にとってのよい生活であると解釈してよいだろう。

また、自分の欲望をコントロールすることの重要性は充分に意識していた。「ある日、娼家に入ったとき、同行した若者の一人が顔を赤らめていると、「危険なのは、入ることではなくて、出てくることができないことだ」と彼は言った」といった言行も記録されている。

クセノポンの『ソクラテスの思い出』^{*2}では、ソクラテスがアリスティッポスの快楽主義に対して反論をおこなうが、アリスティッポスを納得させるには至らないという場面が描かれている (クセノポン, 2011)。

彼〔ソクラテス〕は、次のようなことを語ることによって、周囲に集まった者たちを飲食や情欲や眠気に対して、あるいは寒さや労苦に対して自制心を養うように説き勧めていた、とわたしには思われた。周囲に集まった者たちの一人がこうした事柄に対して放縦の気味があるのを察知すると、「ねえ、答えてくれたまえ」とソクラテスは言った、「アリスティッポスよ、もし君が二人の若者を引き受けて、一人は支配の任に当たるのに十分な能力がつくように、もう一人は支配のことなどに手出ししないように教育しなければならないとなったら、両者それぞれをどんな風に教育するだろうか。

いつものようにソクラテスは、アリスティッポスと短い問答を繰り返して、支配者となろうとする者は、自制心を保ち、食べ物や眠気や性欲に抵抗し、なすべき急務をおこなうような鍛錬を受けねばならないことを認めさせる。そしてまた、自制心を備えた者が支配にあたるべきであり、自制心の弱い人間は支配には手出しさせないようにするべきだということを認めさせた上で、次のように尋ねる。

「ではどうだろうか。これら両者それぞれの配し方は君に分かったのだが、さてこうした配置のどちら側に君自身を配するのが適正であるか、君はこれまで考えたことがあるかね」。

これに対するアリスティッポスの答がふるっている。

「わたしとしては」とアリスティッポスは言った、「けっして自分自身を支配の任に当たりたいと思っている者の側に配したりはしません。なぜなら、自分自身のために必要なものごとを整えるのも大仕事だというのに、それに満足せず、他の国民のために彼らが必要とするものまで供給することを背負い込むのは、どうしてもわたしには愚かな人間のすることだと思われませんか。一方で自分自身が望むものはその多くを満たせないままに、国家の指導者となるからには、国家の望むものはすべてを達成できなければ、そのせいで処罰されるなどということはどう見ても愚の骨頂ではないですか。……わたしとしては、ふんだんに煩わしさを抱え込みたがり、自分のため、また他人のために供与したがるような人たちを、あなたの言われるような仕方教育して、彼らに支配の任についてもらいましょう。しかし自分自身は最も安楽で最も快適に暮らしたいと思っている者たちの側に配するのです。」

^{*2}ソクラテスの言行は、プラトンによって描かれているだけでなく、同時代人のクセノポンによっても描かれており、プラトン作品でのソクラテスとはまたちがった姿を見せてくれている。

アリスティッポスは、支配（政治と社会貢献）などという面倒なことは他人にやってもらって自分自身は安楽に暮らしたい、というのだ。ソクラテスの弟子の中でも一番の不良といえるだろう。さらにそれだけではなく、わざわざ支配者になる鍛錬をして苦しもうとする奴らは馬鹿ではないか、ということまで言う。

ソクラテスさん、帝王にふさわしい技術をあなたは幸いなことと見なしているように思われますが、その技術の教育を受ける者たちは、強制的に過酷さを課された者たちとどう違うのですか。彼らは飢えや渇きに陥ったり、寒さに凍えたり、眠りをとらずに過ごしたり、その他あらゆるひどい目に遭うことを、しかも自発的にやろうというのですから。同じく皮膚を鞭打たれることに、あるいは纏めて言えば、同じく身体をすべてこうした具合に痛めつけられることに、それが自発的であろうと嫌々ながらであろうと、どういう違いがあるのかわたしには分からないのです。すすんで苦難を耐えたがるような人には愚かさ[が] おまけにつく、という以外に何がありますか。」

他のクセノポンやプラトンの作品で何度も言及されるように、ソクラテスは節制とたえざる鍛錬でアテナイ中で知られており、ペロポネソス戦争の際も、攻め込む敵にひるまずしんがりを努めた歴戦の勇者である。そんな大人物に対してこの生意気さはすばらしい。不良とはこうあるべきだとさえ思われる。その後ソクラテスはお得意の神話（ミュトス）や古来の名言を駆使してアリスティッポスを説得しようとするが、生意気不良青年が説得された様子は描かれていない。

4 エピクロス

エピクロス（前 341–前 270）は快楽主義者の代表者だと考えられている。ただし、彼はアリスティッポスのようにそのときそのときの快楽の享受を重視するのではなく、むしろ快楽と対になる苦痛の軽減を目指したとされている。

ひどい苦しみがなくなれば我々は充分快を手に入れたということができる。

快の大きさの限界は、苦しみが全く除き去られることである。およそ快の存するところ、快の存するかぎり、肉体の苦しみもなく、靈魂の悩みもなく、これらが二ついっしょにあることもない。

苦しみは連続的に肉体のうちに存するものではない、かえって、極度の苦しみは、きわめて短い時間しかそこには存せず、肉体の快をたんに超過するだけの苦しみも、幾日となくつづくわけではない。かえって、長期にわたる病気の場合には、肉体において、快の方が苦しみをさえ凌駕するものである。

思慮深く、美しく（よく）生きることができれば快を手に入れることができるし、逆に快がなくては思慮深く、美しく（よく）生きることはいかなる。

思慮ぶかく美しく生きることになしには快く生きることもできず、快く生きることになしには（思慮ぶかく美しく生きることもできない）。快く生きるということのない人は、思慮ぶかく美しく正しく生きないの

であり、快く生きることができないのである。

欲望のうち、あるものは自然的でかつ必須であり、あるものは自然的だが必須ではなく、他のものは自然的でも必須でもなく、むなしい憶見によって生まれたものである。

苦が少なく、快が多い生活を求めることは、そのつもりになればさほど難しいことではない。「憶見」、すなわち勝手な思いこみを捨てるだけでよい。

食欲や睡眠のような欲求は自然なもので、また食事や睡眠をとらなければ生きていくことはできない。しかしそうした欲求はたやすく手に入れることができるし、またその快楽も大きい。性愛（セックス等）に対する欲求とその快楽もまた自然だが、かならずしもそれがなければ死んでしまうわけではない。だから、それがもたらす害悪に注意して、できるかぎり控え目に追求すべきだ。高価自動車やブランド品をもとめるような欲望は、自然なものも必要なものでもない単なる思い込みによるものだ。そのようなものは捨てざるがよい。

自然のもらす富は限られており、また容易に獲得することができる。しかし、むなしい憶見の追い求める富は、限りなく広がる。

我々に本当に必要なものはさほど多くないとエピクロスは考える。

飢えないこと、渇かないこと、寒くないこと、これが肉体の要求である。これらを所有したいと望んで所有するに至れば、その人は、幸福にかけては、ゼウスとさえ競いうるであろう。

特に、胃袋の快、つまりおいしい食事はすべての善の源である。そしてそれはほんの質素なものであっても人間を幸福にする。

いっさいの善の始めであり根であるのは、胃袋の快である。知的な善も趣味的な善も、これに帰せられる。

水とパンで暮しておれば、わたしは身体上の快に満ち満ちていられる。そしてわたしは、ぜいたくによる快を、快それ自体のゆえにではないが、それに随伴していやなことが起るがゆえに、唾棄する。

チーズを小壺に入れて送ってくれたまえ、したいと思えば豪遊することもできようから。

生の限界を理解している人は、欠乏による苦しみを除き去って全生涯を完全なものにするものが、いかに容易に獲得されうるかを知っている。それゆえに、かれは、その獲得のために競争を招くようなものごとをすこしも必要としない。

悪をなす人は快楽や苦痛の量を見まちがえて悪の道を選ぶ。

なんびとも、悪を見て、あえてこれを選ぶわけではない。むしろ、それをより大きな悪と比べて善であるかのように思い、これに惑わされて、悪を追い求めるのである。

不正な行為はそれによっていくばくかの利益や快楽を得られるとしても、当人の心を同様させ苦痛を与える。

正しい人は、最も平静な心境にある。これに反し、不正な人は極度の動揺に満ちている。

不正を犯しながら発覚されずにいることは難しい、そして、発覚されないことについての保証を得ることは不可能である。

あまりに手のこんだ料理や過度の飲酒はそのときには快楽をもたらしても、あとあと二日酔いや不健康という苦しみをもたらすことになる。また特に性愛は一時的には大きな快楽を与えてくれるが、ほとんどの場合は人々を苦しめることになる。

いずれの快も、それ自身としては悪いものではない。だが、ある種の快をひき起こすものは、かえって、その快の何倍もの煩いをわれわれにもたらす。

肉体の衝動がますます募って性愛の交わりを求めている、と君は語る。ところで、もし君が、法律を破りもせず、良風を乱しもせず、隣人のだれかを悩ましもせず、また、君の肉体を損ねもせず、生活に必要なものを浪費もしないのならば、欲するがままに、君自身の選択に身を委ねるがよい。だが君は、結局、これらの障害のうちすくなくともどれかひとつに行き当たらないわけにはゆかない。というのは、いまだかつて性愛が誰かの利益になったためしはないからであって、もしそれがだれかの害にならなかったならば、その人は、ただそれだけで満足しなければならない。

そこで、異性とは距離をおくことが賢明な人間の道である。

見たり交際したり同棲したりすることを遠ざければ、恋の情熱は解消される。

より大きな快を楽しむために、これらのさまざまな苦しみに耐えることは、よりよいことである。また、もっときびしい苦しみに悩まないために、これらのさまざまな快をさしひかえることは、有益である。

ただし、我々人間は一人では生きていけない。どうしても友人をもち交際する必要がある。よい友人は生涯最大の恵みだといえる。

全生涯の祝福を得るために知恵が手に入れるものどものうち、友情の所有こそが、わけても最大のものである。

しかし必ずしもそうした本当の友人たちをたくさんもつ必要はない。気のあう者どうしで仲良くすればよい。エピクロスは実際に、アテナイで庭園付きの小さな家で弟子たちと協働生活おこなっていたらしい。「エピクロスの園」として有名である。

エピクロスの残した言葉でもっとも有名なものは以下のものだ。

隠れて生きよ。

5 アリストテレス

アリストテレス (前 384–前 322) の幸福論 (エウダイモニア論) は現代でも強い影響力をもっている。『ニコマコス心理学』全体が彼の幸福論になっていると考えることができる。後代に影響を与えた有名フレーズが頻出するため、一部を紹介したい。

あらゆる技術、あらゆる研究、同様にあらゆる行為も、選択も、すべてみな何らかの善を目指していると思われる。それゆえ、「善とはあらゆるものが目指すもの」と明言されたのは適切である。(第 1 巻第 1 章、1094a)

これは、『ニコマコス倫理学』冒頭にある非常に有名なフレーズである。ソクラテスの「ただ生きることではなく、よく生きることが重要だ」というフレーズも思いおこさせる。ごく単純に解釈すると、人間がなにをするにしてもわざわざ悪を目指すことはないわけで、誰もがよいものを目指す。人間だけでなく、万物がそれにとってよい状態を目指す、とアリストテレスは考えている。おそらく猫は猫なりに、犬は犬なりに、栗の木は栗の木なりにそれにとってよい状態を目指すのだ。

それでは、あらゆる認識と選択が何らかの善を求めている以上、政治学・倫理学が目指しているとわれわれが主張するところのものとはいったい何であるのか、すなわち行為によって達成されるあらゆる善きもののうちで最高のものとは何であるのか、この問題をここで改めて論じることにしよう。

まず、その名前については、大多数の人々の見解は一致していると言ってよい。なぜなら、一般の大衆も教養のある人々もそれを幸福と読んでおり、「よく生きる (エウ・ゼーン)」ということ、あるいは「よくなす (エウ・プラッテイン)」ということ、を、「幸福である (エウダイモネイン)」ことと同じものと見なしているからである。しかし、幸福について、それが何であるかということになると、人々の意見はくい違い、大衆は知者たちと同じような説明を与えてはいない。(第 1 巻第 4 章、1095a)

我々が目的としていることが幸福 (エウダイモニア) であり、それが「よく生きる」ことであり「よくやっている」ことであることはほぼ全員一致の合意があるのだが、幸福であること、よく生きること、よくやっているといえるのはどういう場合か、ということについては人々の意見は食い違う。

なぜなら大衆は、幸福について快楽や富、名誉などのような、何かはっきりとした目に見えるようなものを考えているからであり、さらに彼らの間でもそれぞれに見方が異なっていて、しばしば同じ人でさえ、たとえば病気になれば健康を、貧乏なときには富をというように、自分の意見をくるくると変えるからである。(1095a)

世間一般の多くの人々は、彼らの生活から考えると当然のことだが、善すなわち幸福とは快楽のことだと見なしているように思われる。それゆえ彼らはまた、「享楽の生活（アポラウスティコス・ピオス）」を愛好するのである。このように言ったのは、生活の種類には、今挙げられたもののほかに、「政治の生活（ポリーティコス・ピオス）」、そして第三に「観想の生活（テオレーティコス・ピオス）」という、およそ三つの主要な類型があるからである。たしかに大衆は、まるで家畜のような生活を選び取っており、まったく奴隷のように見えるけれども、権力的な地位にある人々の多くがあゝのサルダナパロス^aと似たような状態になっている以上、大衆の生活にもそれなりの理由が認められるのである。……他方、教養があって、行動的な人々は、幸福とは名誉のことだと見なしている。なぜなら、これがおおよそ政治生活の目的だからである。……(1095b)

^a古代アッシリアの伝説的王。放蕩の限りをつくした暴君とされている。

アリストテレスは、一般人が目に見える快楽（享楽）、富、名誉、健康などを得ていることが幸福だと考えているということを指摘している。我々は特に、そのときときどきで自分に欠けていると思うことが幸福のために必要だと考える傾向がある。一方で、もうすこし洗練された人々は単なる享乐的な生活ではなく、社会に貢献するような活動（政治）をおこない、名誉を得ることが幸福（よく生きる）であると考えられる。さらには、学究的な人々は学問や精神的な世界の探索などが、社会的・政治的な活動よりもさらに充実したものだと考えることもある。アリストテレス自身は政治的というよりは学究的な人物であったので、彼が「観想の生活」を一番上位に置いたのは頷けることであるが、それが本当にもっとも幸福な生活であるのかということについては、人々の意見は分かれるだろう。そしてそれはアリストテレス自身も認めることだろう。

人間にとっての善（幸福）とは徳（卓越性）に基づく魂の活動である、ということになるだろう。その活動にはしかし、完全な人生において、という条件がさらにつけ加えられねばならない。一羽のつばめが春の到来を告げるものでもなければ、一日で春になるものでもないからである。同じようにして、一日や短い時間で、人は至福にも幸福にもなりはしないのである。（『ニコマコス倫理学』）

この一節も非常に有名なものだ。アリストテレスが考える「幸福」は、ある日幸福で、次の日に不幸になる、といったものではない。たしかに幸福が単に楽しく生きることであるならば、ある日幸福であり次の日に不幸である、ということはあるものの、そうしたものは我々の求める「幸福」とはちがうものだ。我々が幸福になりたい、よく生きたいと願うとき、一日あるいは一時間のあいだ幸福になりたいと願うのではない。人生全体としてよい人生だったとふりかえることができるような人生を送りたいのだ、とアリストテレスは言いたいのだろう。

ただし、アリストテレスは、自分自身の人間的美徳とそれにもとづいた以外にも、富や快楽や暇や友人など

も幸福に生きるために必要だと考えた。そうした余裕がなくてはよく活動することができないからである。特にアリストテレスは友人関係、友愛（フィリア）を幸福な人生に欠くことができない要素だと考えた。

愛する友なしには、たとえ他の善きものをすべてもっていたとしても、だれも生きてゆきたいとは思わないだろう。(1155a)

『ニコマコス倫理学』から

われわれはこう言った、幸福とは「状態ではない、と。なぜなら、もしそれが状態であるなら、いわば植物の生を生きながら、生涯を通じて眠っているような人にも、あるいはまた最大の不運に陥っている人にも、幸福はそなわっていることになってしまうからである。そこでもしこのような見解が納得のゆくものではなくて、以前に述べたように、われわれはむしろ幸福をある種の「活動」と解すべきだとすれば、そして、さまざまな活動のうち、ある活動は必要なもの、つまり他のもののゆえに選ばれるものであるのに対して、他の活動はそれ自体で選ばれるものだとするれば、その場合明らかに、幸福とは、他のもののゆえに選ばれる活動の一つではなく、自足的なものだからである。また、それ自体で選ばれる活動とは、その活動から、当の活動をこえて、さらに求められるものが何もないような活動にほかならない。そして、徳に基づく行為こそ、このようなものと考えられるのである。事実、美しく、立派なことを行なうことは、それ自体のゆえに選ばれるものに属する。

しかし、遊びのなかで楽しいものもまた、一般に、こうしたものだと思われる。というのも、人々は楽しい遊びを、他のもののゆえに選びはしないからである。実際、人々は身体や財産をかえりみずに、楽しい遊びから利益を得どころか、損害をこうむることまでするのである。そして、世間で幸福だと見なされている人々の多くが、遊びで時を過ごすことに逃げ込むのであり、それゆえ僭主たちのところでは、この種の娯楽において機知に富む者たちが名声を博するのである。それというのも、そのような者たちは僭主の目指していることの方面で、自分自身を愉快的な人間として提供するが、僭主が必要としているのはそうした人間だからである。こうして、この種の遊びは、権力の地位にある者たちが余暇を過ごすようなものであることから、一般に幸福に満ちたものと思われるが、しかし権力の地位にある人たちというのは、おそらく、何の証拠にもならないだろう。なぜなら、もろもろの立派な活動が生まれてくるところの徳や知性は、権力を握ることにはかかっていないからである。

だから、しばしば述べたように、貴重で快いものというのは、立派な人にとってそうであるようなものである。そして、それぞれの人にとっては、固有の状態に基づく活動が最も望ましく、したがって、立派な人にとっては徳に基づく活動が最も望ましいのである。それゆえ、幸福は遊びのうちには見出されない。事実、遊びが目的であるというもおかしな話であり、われわれが全生涯にわたって努力して苦しむのも、遊ぶことのためだというのであれば、奇妙なことである。なぜなら、われわれはあらゆることを、何か他のことのために選んでいると言えるからである。ただし、幸福は別である。幸福は「究極目的（テロス）」だからである。また遊びのためにまじめに仕事をし、苦勞するというのは、愚かで、はなはだ子どもじみたことだと思われる。逆に、アナカルシスが言っているように、「まじめに仕事をするために、遊ぶ」という見解の方が正しいと思われる。つまり遊びはいわば骨休めであって、われわれは連続

的に労力を固むけることができず、どうしても骨休めを必要とするのである。したがって、骨休めは目的ではないのである。活動のためにこそ、骨休めがなされるからである。

しかるに、幸福な生活は、徳に基づいていると考えられる。そして徳に基づく生活は、真剣さを伴うものであって、遊びのうちにはないのである。さらにわれわれは、真剣な事柄とは、遊びと結びついたふざけたことよりも善きものであり、より善きものの活動は——それがわれわれのよりすぐれた部分の活動であれ、あるいはよりすぐれた人間の活動であれ——、つねに、いっそう真剣なものであると主張する。だが、より善きものの活動はそのこと自体すでに、よりすぐれており、より幸福に満ちたものなのである。(アリストテレス, 2002)

参考文献

プラトン (1966) 「ゴルギアス」, 田中美知太郎 (編) 『プラトン I』, 中央公論社.

納富信留 (2021) 『ギリシア哲学史』, 筑摩書房.

アナス (2004) 『古代哲学 (〈1冊でわかる〉シリーズ)』, 岩波書店.

—— (2008) 『プラトン (〈1冊でわかる〉シリーズ)』, 岩波書店.

—— (2019) 『徳は知なり: 幸福に生きるための倫理学』, 相澤康隆訳, 春秋社.

アリストテレス (2002) 『ニコマコス倫理学』, 朴一功訳, 京都大学学術出版会.

エピクロス 『教説と手紙』, 岩波文庫, 出隆・岩崎充胤訳, 1959.

クセノボン (2011) 『ソクラテス言行録 1』, 内山勝利訳, 京都大学出版会.

ディオゲネス・ラエルティオス 『ギリシア哲学者列伝』, 加来彰俊訳, 岩波文庫.